

伊波普猷の「日琉同祖論」をめぐって：初期の思想形成と変化を追う試み(1)

著者名(日)	三笥 利幸
雑誌名	社会文化研究所紀要
巻	62
ページ	47-72
発行年	2008-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000378/

伊波普猷の「日琉同祖論」をめぐって 初期の思想形成と変化を追う試み(1)

三 筈 利 幸

はじめに

沖縄学の双璧とされる伊波普猷と東恩納寛惇とが、ともに戦中期に戦意高揚のための一文を『東京新聞』に寄稿していたと大きな見出しを使って伝えたのは、2007年5月19日の『琉球新報』であった。

沖縄戦の組織的戦闘終結後の1945年6月27日に、東恩納は、「壮烈・沖縄に應へん」という題名の文章を寄稿し、「本土防衛に鉄壁布陣の時間を稼いだ沖縄部隊の功績は、永久に没する事は出来ない」と、沖縄守備軍を讃えた^①。これに対して、伊波は沖縄戦開始直後の1945年4月3、4日の両日にわたって「決戦場・沖縄本島」と題した一文を寄稿している^②。この文章は、「敵は遂にわが沖縄本島に上陸してきた。勇猛の気象を持った琉球人が今こそ、その愛する郷土を戦場として奮戦してゐる事を想ふと私も感慨切なるものがある」という一文から書き始められる。どこまで正確に沖縄の戦況を把握していたのかはわからないが、伊波は、沖縄の人々が「今や皇国民としての自覚に立ち、全琉球を挙げて結束、敵を邀撃しているであろう。」と述べ、「墳墓の地に勇戦する琉球人に対し、私は大きな期待を抱く者である。」と締めくくったのである。東恩納の文章が沖縄戦をあとから意義付けたのに対して、伊波のそれは沖縄戦を遂行していくまさにそのときに書かれたもので、この資料を発掘した伊佐真一は、当時東京にいた伊波が「現地沖縄の人びとに向けて放った『檄文、』」[伊佐2007]と位置づけた。

さて、伊佐がこの「決戦場・沖縄本島」を発掘したことが『琉球新報』誌面

にあらわれ、また、同氏が同年4月25日に『伊波普猷費批判序説』を出版したこともあって、あらためて、伊波をどう評価するのかについて大きな論争が巻き起こった。ここでその論争の内容を詳細に追っていくことはできない^④が、こうした論争が巻き起こる原因の一端は、まちがいなく伊波自身にある。「沖縄学」の父と呼ばれることにあきらかなように、伊波は沖縄の「個性」「無雙絶倫」^{ユニークネス}〔古初:101〕にこだわり続けた。しかし、そのいっぽうで伊波は生涯にわたって「日琉同祖論」という思想を持続けたのである。そうした伊波の思想からみれば、今回発掘された「檄文」、は、戦中という時代ゆえの「例外」などとして片付けることはとうていできない。彼の思想的核部分とのかかわりを吟味しなければならない、論争的な一文なのである。

この論争に触発されつつ、私は、論争の根幹部分にあると思われる伊波の「日琉同祖論」について考察を加えたいと思う。その際、いかにして「日琉同祖論」が形成、展開されていったのかを、伊波の最初期の思想から追いかけてながら検討してみたい。伊波の「日琉同祖論」は、民俗学者柳田國男との出会いの前後にみられる変化——南下説と北上説——を指摘されることはあっても、初期の思想からいかにそれが形成されていったのかが検討されることはほとんどない。しかし、伊波の「日琉同祖論」は決してはじめから完成されたかたちで唱えられたのではなく、その思想展開のなかで変化しながら形成されていった。この過程を含めて「日琉同祖論」を検討し直すことが、伊波がそれにいかなる意味をこめたのかを探る一つの大きな手がかりとなると考えられる。

第1節 「沖縄人の祖先に就て」の改訂

1 「日琉同祖論」と向象賢の位置

まず、伊波の「日琉同祖論」は、一般にどういうものだと理解されているのだろうか。たとえば、沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』にある「日琉同祖論」の項目——執筆者は比屋根照夫——では、次のように記されている。

日本人と沖縄人の民族的な起源が同一であり、日本人と沖縄人の人種的・文化的同一性を学術的に立証することによって民族的一体性を強調する理論。日琉同祖論の歴史的な系譜は、17世紀後半、琉球王国・摂政の要職にあった羽地朝秀(向象賢、1617～75)の提唱にかかり、琉球王国末期の三司官宜湾朝保(向有恒、1823～76)によって詳細に展開され、近代にいたる。さらに近代以降は、バジル・ホール・チェンバレンの言語学的な比較研究、鳥居龍蔵による人類学的な研究によってこの理論は深化され、伊波普猷による日琉同祖論の統合化によって、学問上、確固不動の位置を獲得した。伊波の日琉同祖論は、言語学・文学・歴史学・民俗学・人類学などの近代科学の成果を駆使し、日本人と沖縄人は民族的起源を同一にするものであり、〈琉球民族〉は〈大和民族〉の一分枝であることを証明することにあった。……

「日琉同祖論」はなにも伊波オリジナルの思想ではなく、政治社会状況や文脈、論者によって異なる姿を見せるものなのだが⁽⁴⁾、この「日琉同祖論」という項目を比屋根は、ほとんど伊波のそれに依拠してまとめている。すなわち、向象賢を日琉同祖論の鼻祖とし、宜湾朝保からB.H.チェンバレンの言語学的検討を経て、さらには鳥居龍蔵らの人類学的な論証も加えられていくという構成は、伊波の代表作『古琉球』の第1論文「琉球人の祖先に就いて」における議論をそのまま踏襲しており、ここにはまさに伊波普猷の「日琉同祖論」が要約されて示されているといっていよい。この比屋根による紹介は、伊波の「日琉同祖論」にかんするスタンダードな理解といえるだろう⁽⁵⁾。

さて、このように理解される伊波の日琉同祖論において特徴的とされるのは、向象賢をその始祖としているところである。現在、『伊波普猷全集』第1巻に収録されている『古琉球』では、「琉球人の祖先に就いて」の冒頭に向象賢が登場する。よく知られている一節ではあるが、引用しておこう。

二百数十年前世に出た琉球の経世家羽地王子向象賢^{ハネジ シヤウシヤウケン}は、其の『仕置』の中に、

竊惟者此國人生初は、日本より為渡儀疑無御座候。然者末世之今に天地、山川、五形、五倫、鳥獸、草木の名に至迄皆通達せり。雖然言葉^{アタリ}の余相違者、遠国之上久敷通融爲絶故也。五穀も人同時日本より為渡物なれば、云々。

と書いてゐるが、氏は言語の上から琉球人の祖先が日本から渡つたといふ説を唱へた最初の人である。[伊波①:17]

同じく『古琉球』の第2論文である「琉球史の趨勢」において、向象賢について念を押すように次のように指摘される。

諸君は言語の比較から日本人と琉球人とが同一の人種であるとの説を始めて称へた人を言語学者チェムバレン氏と聞いて居られるかも知れぬが、これはチェムバレン氏ではなくて、吾が向象賢氏であると心得て貰ひ度いのであります。[伊波①:54]

すぐ後に触れるように、こうした向象賢の位置づけにかんしては批判もあるが、ともかく、『古琉球』において伊波は向象賢を「日琉同祖論」を唱えた嚆矢としている。

しかし、実は伊波はその最初期から向象賢にこうした位置づけをしているわけではなかった。むしろ、最初期の伊波は、後に詳しく述べるように、言語学者B.H.チェンバレンに依拠して「日琉同祖論」を唱えていたのである。とりあえず一例をあげておけば、1901年の論考「琉球史の瞥見」では、次のように述べている。

吾人は実際に日本〔本〕土にては既に已に死語となり了れるものにして

現に琉球の通用語となりて存在するものゝ夥しきを見るなり吾人が天孫人種の祖先と琉球人のそれとがかつて共同なる根元地に住してチャムバレン氏の所謂両語の祖たりし国語を使用したりけむ有史以前を追想して琉球今日の住民の大多数を以て天孫人種大移動の途中手を別ちて居残りし者の後裔ならんと推測する亦故なしとせんや[伊波①:526]

この箇所に限らず、この頃の伊波はチェンバレンに言及するのみで、向象賢をとりあげることはない。となれば、伊波は、チェンバレンを導きの糸とした最初期から、あるところで向象賢を「発見」して「日琉同祖論」を唱えるようになったと考えられるだろう。それは伊波の「日琉同祖論」が、彼の生涯を貫く思想でありながら、彼の思想的営為のなかで内的な変化を遂げていることを意味することになる。

以下では、伊波の「日琉同祖論」にこめた思想的意味そしてその変化を探るために、すでに言及した論考「琉球人の祖先に就いて」にこだわりたい。というのも、この論考は、伊波が初期から晩年に至るまでずっとこだわり続けた論考であり、伊波の思想的営為を知る手がかりとしては、欠かすことのできない論考だからである。

2 改訂の経緯

伊波が「日琉同祖論」を、向象賢、宜湾朝保、チェンバレンらに依拠して唱えたのは、1906年発表の論考「沖縄人の祖先に就て」である⁽⁶⁾。この「沖縄人の祖先に就て」は、1906年12月5日から9日にかけて『琉球新報』に掲載された(以下では『新報』版とよぶ)。この後、伊波は2年あまりの時間をおき、1909年2月3日から17日にかけて、題名を「琉球人の祖先に就いて」と変え、本文にも大きな改訂をした上で『沖縄毎日新聞』(以下『沖毎』と略す)に転載した⁽⁷⁾。さらに、この論文は同年11月には『沖縄青年』第7号(沖縄青年会創立二十周年記念号)に、また、同年11、12月には『東亜之光』第4巻11、12号に掲載さ

れた。次々と転載されたこの論考は、1911年3月に『琉球人種論』と題して単行本化され——伊波の最初の著書となる——、さらに、題名がまた「琉球人の祖先に就いて」に戻されて、他の論文とともに1911年12月、『古琉球』初版の冒頭に収録された。『古琉球』は、再版（1916年）、三版（1922年）、改訂初版（1942年）、改訂再版（1943年）、改訂三版（1944年）と、収録論文が変更されたり、写真などの資料が加えられたりと改訂されたが、「琉球人の祖先に就いて」はその冒頭におかれ続けた。

以上のような改訂の経緯は、『伊波普猷全集』に収録されている外間守善・比嘉実編「著作目録」に記載されている。しかし、その目録の作成者のひとりであり、全集の編者でもある外間は、改訂について、『新報』版から「少しずつ書きなおして『琉球人種論』（明治四四年三月）という小冊子にまとめられ」[外間1976:506]たと指摘するのみで、改訂による内容的な変化にはあまり深く注意を向けていないようである。

それは全集全体の編集方針にもあらわれていて、たしかに伊波の著作や論文を網羅的に収集して編集するという気の遠くなるような作業の上に全集が編まれたという編者の苦労は、全集をひもとくものには随所で感じることができる。しかし、残念ながら全集版では、改訂されていたものにかんしては、もっとも新しい版が底本とされ、それ以前の版は基本的に収録されていないため、それらを比較検討することはなかなかむずかしい。「沖繩人の祖先に就て」に改訂が施されたという事実は知られるところとなっているが、改訂による変化にこだわった研究は、鹿野政直や屋嘉比収にみられるくらいである⁸⁾。ただし、鹿野や屋嘉比でさえ、すぐ後で指摘する向象賢の位置づけの変化には積極的に言及してはいない。

3 なにがどう変わったのか

では、向象賢は伊波の「日琉同祖論」にどのように登場するのか。実は伊波は、向象賢を自身の「日琉同祖論」に引き入れるだけでなく、彼への評価を改

訂によって変化させてもいる。とくに『新報』版から『沖毎』版への改訂による変化がもっとも大きく、後の版は『沖毎』版をほぼ踏襲しているといっている。

伊波は向象賢の『羽地仕置』の一節⁽⁹⁾を引用して、「日琉同祖論」の根拠とした。ここでは煩を厭わず、『新報』版、『沖毎』版、『古琉球』初版の当該部分を引用しておこう。なお、各引用にある傍線およびゴシック体表記は、便宜的に引用者が施したものであり、原文には傍線もゴシック体の使用もない。

『新報』版

二百三十一年前に死なれた羽地王子向象賢はその「仕置」といふ隨筆の中に
竊惟者此國人生初は日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今に天地山川五形
五倫鳥獸草木の名に至迄皆通達せり雖然言葉之餘相違者遠國之上久敷通融爲
絶故也五穀も人同時日本より爲渡物なれば云々
といふことを書いてゐる氏は言語の類似を見て沖繩人を直ちに日本人種に属
するものとしたのである**氏の時代は日本崇拜の時代であつたことを心得て置かね
ばならぬ**[新報①:33-40]⁽¹⁰⁾

『沖毎』版

之に就て二百三十二年前に死んだ琉球の政治家羽地王子向象賢氏は其『仕置』
いふ隨筆の中に竊惟者此國人生初は日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今
に天地山川五形五倫鳥獸草木の名に至迄皆通達せり雖然言葉之餘相違者遠國
之上久敷通融爲絶故也五穀も人同時日本より爲渡物なれば云々
と書いてゐる氏は言語の上から琉球人の祖先は日本から渡つたといふ説を唱へ
た最初の人である。[沖毎:43]⁽¹¹⁾

『古琉球』初版

之に就いて二百三十一年前に死んだ琉球の經世家羽地王子向象賢は其『仕置』
の中に、
竊惟者此國人生初は日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今に天地山川五形
五倫鳥獸草木の名に至迄皆通達せり雖然言葉之餘相違者遠國之上久敷通融爲
絶故也五穀も人同時日本より爲渡物なれば云々
と書いてゐる。氏は言語の上から琉球人の祖先は日本から渡つたといふ説を唱
へた最初の人である。[古初:3]

一読して、向象賢にたいする評価が変わったことがすぐにわかるだろう。こまかな点は別として、改訂は、傍線部分が修正されたこと、および、『新報』版のゴシック部分が削除されたこと、この2つである。

向象賢を引き合いに出していることそれ自体が、彼を日琉同祖論者として評価していることを意味するとはいえ、『新報』版の段階では、伊波の向象賢にたいする評価はそれほど積極的なものではない。言語が類似していることで「直ちに」沖縄人が日本人種に属すると判断しているという指摘は、その判断の性急さあるいは根拠の弱さを指摘していると読める。

伊波が——そしてその後の研究者たちが——『羽地仕置』のこの箇所を「日琉同祖論」と解釈したことを批判したのは、高良倉吉であった⁽¹²⁾。たしかに、高良のいうように「向象賢の「日琉同祖論」は、彼が学者ぶって唱えた説ではなく、「彼の研究・検討の結果を学説として提示するという目的で『羽地仕置』に述べたものではない」だろう[高良1989:173]。周知のごとく『羽地仕置』は向象賢の摂政期に出された文書を集めたものであり、当該箇所は国王の久高島参詣停止を求めた部分であった。したがって、それは向象賢の「研究」にもとづく「学説」でないのはもとより、彼の中心的な主張ですらないことはあきらかである。

しかし、すくなくとも『新報』版の段階では、伊波自身、この箇所を向象賢の「研究・検討の結果」あるいは「学説」としてとらえていたのではなく、むしろ、言語の類似から論証抜きに「直ちに」なされた発言であるととらえていたようだ。高良の批判は真摯に受けとめる必要があるとはいえ、『新報』版の段階の伊波には、その批判のすべてが当てはまるわけではなさそうである。

さらに注目すべきことは、伊波が向象賢は「日本崇拜の時代」に生きていた人物であり、それを十分ふまえてこの箇所を読むべきだと読者に注意をうながしていることである。ここで「日本崇拜の時代」がいったいなにを意味するのかは、後に探ることにするが、「崇拜」の二文字から、伊波が向象賢の主張を、学問的で確実な根拠付けがなされたものとみてはいなかったと考えていいだろう。

整理しておこう。向象賢はたしかに「日琉同祖論」を唱えた人物である。しかし、その人種帰属の判断は言語だけでなされ、論証を経てもいない。ましてや、向象賢が日琉同祖論を唱えたのは「日本崇拜」という時代思潮に大きく影響されてのことで、その点は差し引いて読むべきである。向象賢は「日琉同祖論」を唱えた人物と位置づけられてはいるものの、伊波は向象賢の主張をひとつの「説」「学説」として評価はしていないのである。

これが『沖毎』版以降になると、向象賢が日本崇拜という時代思潮に影響されているという指摘がすべて削除され、さらに、言語の類似から「直ちに」判断を下したという、その性急さ、根拠の薄弱さを示すような文言も消されてしまう。いやむしろ、言語という観点から日琉同祖論という「説」を唱えた「最初の人」であると積極的な評価に変わってくるのである（『古琉球』初版の巻末には『羽地仕置』の原文が附録として付けられてもいる）。すでに紹介した高良の批判は、たしかに『沖毎』版以降であればなるほどそのとおりだろう。ただし、私が以下で問題としたいのは、『羽地仕置』の正確な読みでもなく、また伊波やそれ以降の研究者の解釈の間違いでもない。そうではなく、伊波は『新報』版では、向象賢に依拠して「日琉同祖論」を唱えることには慎重な姿

勢を持っていたようであるが、それが『沖毎』版以降、新文献や新資料が発見されたわけでもないのに、なぜ向象賢が「日琉同祖論」という「説」を唱えた
とまで評価するようになったのか、その思想的な変化について考えてみたいの
である。

ここまで論じてきたところから、伊波の「日琉同祖論」は、最初期のチェン
バレンのみに依拠した時期から、1906年に向象賢に言及しはじめる時期、そし
て向象賢への評価を変更していく時期と、内容的にあるいは質的に変化していっ
たとみていいだろう。その変化とはいかなるものか。以下では、1906年以前の、
最初期の伊波の論考にみられる「日琉同祖論」がいかなるものであるのかを検
討し、その後、今度は「沖縄人の祖先に就て」が、やがて「琉球人の祖先に就
いて」に改訂されて『古琉球』へと収められていく、1906年以降の「日琉同祖
論」の展開について考察していこう。

第2節 伊波の初期の思想(1)——1900-2年

『伊波普猷全集』第11巻の「年譜」によれば、1895年に尋常中学校のスト
ライキ事件によって退学を命じられた伊波は、翌1896年上京し、明治義会尋常中
学校5年に編入、1897年3月によりやく中学を卒業した。中学卒業後のある時期
に、伊波は「秋風録」という随筆を『沖縄青年会報』に投稿しているらしい。
これが伊波の最初の作品であるとされるが、しかし、現在この随筆は残ってお
らず、いかなる内容がそこに書かれていたのかはわからない。伊波の執筆した
ものとして残っている最も古いものは、1900年の「琉球だより」である。まず
はこの論考から検討していこう。

1 「日本思想」と「支那思想」の衝突と調和

「琉球だより」は、第一高等学校を受験するも失敗し、いまだ東京で受験勉
強中の伊波が物した一文であり、少年園発行の『文庫』と題する月刊誌の13巻
6号に「はまのや」のペンネームで投稿されたものである。『文庫』第1巻第1号

の『『文庫』寄稿心得』によれば、本誌は『少年文庫』が改題されたものであり、「中等教育の程度にある全国学生の機関雑誌」であり、「其採録する所は、多くは学生の手になるものにして、実に今の学生をして、磅礴する気焰萬丈を吐かしむるものは、独り此誌上に在りとす」とある。また、伊波の論考が掲載された第13巻6号巻末の『『文庫』の特色并に寄稿略則』によれば、『文庫』は「自由寄稿」の雑誌であり、「自由なる文壇に遊ばんと欲する者は我が誌に來れ」とある。比屋根照夫によれば、こうした特色を持つ『文庫』には当時全国の青年が投稿していたらしく、吉野作造が中学時代に投稿してもいるとのことである⁽¹³⁾。

さて、「地方読書界」という大きな見出しのもとに「琉球だより」という表題が付けられたこの一文は、滝沢馬琴の『椿説弓張月』によって「変な所しか想像」されなくなった琉球イメージとはまったく違う、「久しく文明の潮流以外に逸してゐた琉球、即ち沖縄の読書界を紹介しやうと思ふ」というところから、書き始められる[伊波⑩:3]⁽¹⁴⁾。しかし、その「琉球だより」は全体に暗く、ニヒリズムすら漂っている。

冒頭部分で目に付くのは、琉球と日中両国との関係についての伊波の見解である。

琉球は、日本及び支那の間に介在する島国なれば、昔より常に惴々焉として両国の鼻息を窺つたのである、支那に対して方物を貢し其封冊を享けたのは、一は交易の利を得んが為で、二つには其保護を得んが為であった、又日本に対して時々の来聘を以て臣属を表したのも、同じ理由に外ならない。[伊波⑩:3]

端的に言えば、日本および中国に対する琉球の関係は、いわゆる戦略的な関係だと伊波はみている。文化的あるいは人種的な同一性などという論点はまったくみられないこの一節は、「日琉同祖論」とはかなり遠いところにあるといえ

よう。

しかし、この論考には、伊波の琉球史あるいは琉球思想史の基礎的な視角が現れているという点に注目しなければならない。伊波は琉球には「古來思想の二大潮流があり、「一つは日本思想で、他は支那思想」で、その両者は「幾度か調和せんとして、又幾度か衝突した」という。とくにこの「琉球だより」でとりあげられるのは、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって負担を強いられた琉球において、「支那思想」が膨張したところからである。その後、「薩摩の琉球征伐」にあいつつも「支那との交通は相変わらずづづいた」ために、「江戸の文化と支那の文明とが、この海中の小王国に於て面白く調和」するにいたった。伊波の高く評価する蔡温もこの「調和」の時期に現れた人物であり、蔡温を「琉球のペリクリース」と述べている。しかし、その調和も、「日本の国民的統一の時代なる明治の初年」になると、「琉球併合の事件」によって、「両思想の大衝突」がはじまってしまう。その「両思想の決勝点」を、1894年の日清戦争とみる伊波は、「今日となつては日本思想のみ流れてゐる」と1900年時点の琉球における思想状況をとらえた⁽¹⁵⁾。

この段階での伊波は、「大波瀾の後はいつも寂寥がちである、寂寥は鎮静の期である、休止の期である、沖縄県の読書界がトント振はないのも道理だ。」[伊波⑩:4]と述べて、現在の思想的沈滞を歎くばかりである。ともあれ伊波は、琉球史、とくに琉球思想史を、「日本思想」と「支那思想」との衝突と調和というダイナミズムからとらえようとしていることはあきらかであろう。

2 「琉球の歴史と其言語と」

「琉球だより」を発表したのち、第三高等学校に入学した伊波は、三高の雑誌である『嶽水会雑誌』第9号(1901年3月発行)に蕉蔭庵のペンネームで「琉球の歴史と其言語と」と題する論考を寄稿した⁽¹⁶⁾。「琉球だより」がいわゆる沖縄の思想や出版、言論界の短い紹介であり、その意味では伊波の思想を深く知りうるようなものとはいいがたかったのに対して、この「琉球の歴史と其言語と」

は、ようやくの思いで学生生活にはいった伊波の、思想的原点をみることが出来るものといえる。

まず最初に指摘しておくべきは、琉球史および琉球語についての見解を述べるにあたり、伊波が「日琉同祖論」を提示しているということである。

此のところも亦自ら称して天神の裔といふ者の住する所にして、彼等は古事記の中のことばに類似せることばを語り、古事記中の神話に髣髴たる神話を有す。而して彼等は世の史家及び語学者が来つてその歴史を探索し、その言語を研究せむことを切望して已まざる者なり。あらず彼等は二千有余年前、天孫人種渡來の途中、手を別ちて残留せし者の子孫にはあらぬか。[伊波⑩:225]⁽¹⁷⁾

これが現在確認できる伊波の論考のなかで、最初の「日琉同祖論」である⁽¹⁸⁾。伊波はこの引用部分の後、すぐに琉球史の具体的な議論に入っていく、これ以上「日琉同祖論」それ自体を論じることはない。もちろん、三高入学後間もない時期であり、正面切った議論が展開できるような準備もなかったのだろう。この論考では「琉球が多く の点に於て日本と古來共通の思想を有したりしこと」を示そうとしたとはいいいながらも、「吾人が以上述べ来りたるものは、琉球史及び其言語の見本のみ、唯それ見本のみ」であって、「世の史家、言語学者、及び人類学者」のさらなる研究によって確実な説としていく必要を述べている[伊波⑩:236]。しかし、いやそれだからこそ、この論考には、伊波の「日琉同祖論」という思想の原点が示されていると考えられはしないだろうか。彼自身が述べているとおり、伊波は研究をすすめていくなかで、帰納的に「日琉同祖論」に到達したわけではない。自らの立場を「日琉同祖論」とすることは、一種の「決断」であったといっていいたいだろう。以下では、本論考の内容を一瞥しておこう。

まず、琉球史は、すでに1900年の「琉球だより」で示した、「日本思想」と

「支那思想」の衝突と調和という線を踏襲して描かれる。その上で、伊波は現在を「殖民地的時代」と呼ぶ。

然れとも歴史はくりかへすものなり、所謂両思想の調和者時勢の解釈者として力を政事に用ひし蔡温の死後は琉球また一個の人物を産せず、時勢は一転して『ウランダー』時代となり、再転して所謂両思想最後の衝突なる琉球合併となり、更に三転して今日の殖民地的時代となりぬ。
[伊波⑩:229]

「琉球だより」では「寂寥」「休止」「鎮静」という時代診断を下していた伊波だが、わずか1年で、そうした比喩的な表現では言い表せないような状況の悪化をみているのだろう。そして、この「殖民地的時代」の到来は、時の日本政府による暴政などによってもたらされたというより、日本思想を十分に消化できない琉球に原因があると考えている。

之を要するに、琉球歴史ありてより、最近に至る凡そ七百有余年間の歴史は、日本思想と支那思想との交互消長の記録といふも不可なきなり。而も日本の勢力の増加は、其革命と争闘との記録を変じて、平和と安寧との記録となしぬ、これ彼の蔡温が夙に其『教条』と『独物語』とに於て語るところなり。然れども、不健全なる琉球は遂にこの平和と安寧とを消化する能はずして病みぬ。[伊波⑩:229]

みられるように、伊波は、琉球史を「日本思想」と「支那思想」の衝突と調和というダイナミズムでながめつつ、「日本思想」を「平和と安寧」をもたらすものと位置づけた。しかし、現実には「平和」も「安寧」も訪れず、「殖民地的時代」を迎えてしまった。というものの、琉球の側がこれを消化できないためである。これは、窮状極まる沖縄を遠くから憂える思いの表れであり、また、

そうした窮状を打開できずにいる故郷の琉球人への叱咤激励でもあっただろう。

次に伊波は琉球語についての考察に移る。琉球史については、「日本思想」だけでなく「支那思想」の影響を考えざるを得なかったのに対して、琉球語は、中国語の影響をまったく受けていないと断言する。

既往に於けりし琉球の運命が既にかくの如くなるを見て、その言語も亦其歴史と同一の運命を有するものと思ふもの無きにあらずとも、大に然らず、そは明の洪武年間に彼の地に帰化したりし唐榮の三十六姓が其数少からざりしにも拘らず、その言語、風俗の点に於て感化を及ぼす能はざるのみか却て感化せられて、今日にては毫も琉球人と異るところなきにても知らるべし、琉球語が毫末も支那語の影響を受けざりしは其系統の根本的に異なるが故にして、其日本語と一致若しくは類似する処あるは、寧ろ琉球本来の面目を存せるのみ。琉球語が日本語の姉妹語なることは、特に喋々を要せざるなり。[伊波⑪:230]

伊波が「日琉同祖論」を語る上で、琉球史と琉球語とを必要としたことの一端を、ここから垣間見ることができよう。すなわち、琉球人は「天孫人種」の子孫であり、日本人と同祖であることはまちがいないのであるが、その歴史をみれば、中国の影響を受けていることは否定できない事実である。さらに、日本思想を十分消化できない琉球は、「殖民地的時代」となってしまった。しかし、それでもなお、言語という点からみれば、日本語と琉球語の関係は直接的なものであり、そこに中国の影響は認められない。歴史あるいは思想史の〈表層〉部分は中国の影響を受けることがあっても、言語という〈古層〉に存在する日本との関連は純粹で揺らぐことはない。こうした主張になっている。

この時期の伊波にとって、言語は日本と琉球をつなぐぎりぎりの、そして強力な要素であった。歴史的には日中両国の影響を受け、また、日本思想を消化できずにいる琉球にあって、「日琉同祖論」の確たる基礎が言語に求められる

のである。

3 B.H.チェンバレン

この言語的な同祖性を科学的に根拠付けるために伊波が依拠するのが、B.H.チェンバレンの言語学であった。

多年そ（琉球語が日本語の姉妹語であること——引用者）を研究せし博
言学者チャンバーレン氏は説をなして曰く『日本と琉球との両語典を精
較するに、其相一致せること、猶「スペイン」語と「イタリー」語とに
於けるが如し、今その両語の祖たりし国語ありしものとすれば、日本語
は其祖語の一部を多く存し、琉球語は他の一部を多く存せるものと云ふ
べし、されば現今の日本語が古代の日本語を代表せるよりも、却て琉球
語が日本の古語を代表せること往々是れあり、特に動詞の転化に於て其
較著なるを認め得可し』と、吾人は氏が言へる如く今日実際に我本土に
は已に消滅せる語にして猶琉球の通用語となれるものゝ夥しきを見るなり。
[伊波①:230]

この「琉球の歴史と其言語と」は改稿され、題名も「琉球史の瞥見」と変えられて、1901年10月21、23日の『琉球新報』に掲載された。そこでも同様に「日琉同祖論」が唱えられ、チェンバレンが引き合いに出される。

吾人は実際に日本〔本〕土にては既に已に死語となり了れるものにして現に琉球の通用語となりて存在するものゝ夥しきを見るなり吾人が天孫人種の祖先と琉球人のそれとがかつて共同なる根元地に住してチャムバーレン氏の所謂両語の祖たりし国語を使用したりけむ有史以前を追想して琉球今日の住民の大多数を以て天孫人種大移動の途中手を別ちて居残りし者の後裔ならんと推測する亦故なしとせんや[伊波①:526]

これらの引用にみられるごとく、「博言学者」チェンバレンによる、言語学的な知見によって、日本語と琉球語とはまちがいなく姉妹語であると伊波は確信している。この「琉球史の瞥見」では、のちの伊波の常套句となる「琉球は天然が時間ネチュアを場所タイムの間に顕はして吾人に与へたる大なる恩恵」[伊波①:525]というフレーズも使われる。伊波が本格的に言語学を学ぶのは1903年の東京帝国大学入学以降とされるが、すでに三高時代以前⁽¹⁹⁾から伊波には言語学、すくなくともチェンバレンへの関心があり、それが彼の「日琉同祖論」を学問的に裏付ける位置にあったのである⁽²⁰⁾。

(続く)

凡例

伊波の著作、論文については、服部四郎・仲宗根改善・外間守善編『伊波普猷全集』（全11巻、平凡社、1974-76年）を底本とし、必要に応じて、雑誌や新聞あるいは単行本などから引用を行った。また、そのひとつひとつをことわらなくとも、伊波の経歴や書誌情報などについては、本全集各巻末の「解題」あるいは第11巻所収の「年譜」「著作目録」を参照している。

引用箇所は、全集から引用した際には、巻数を丸数字、当該ページを算用数字を使って、たとえば[伊波①:245]のように記した。ただし、全集版以外の『古琉球』からの引用箇所は、「古」という文字に続けて版名を記した略号を使って示した。たとえば、『古琉球』初版102ページからの引用は、[古初:102]とした。「沖縄人の祖先に就て」およびそれに関連するいくつかの伊波の論考からの引用については、別の略号を使用した。このことについては、本文中の指示および注(10)、(11)、を参照。また、東恩納寛惇についても『東恩納寛惇全集』（全10巻、琉球新報社、1978-92年）を使用した場合は、[東恩納②:125]のように

記した。それ以外の場合は、伊波に限らず、名前、出版年、ページの順に、たとえば[外間1976:504]と記した。

引用にあたって、とくに必要とする場合以外は、すべて旧漢字は新漢字に改めた。また、変体仮名は通常の仮名に改めた。

文献

新川明 1971=1996 『反国家の凶区——沖縄・自立への視点』社会評論社。

新川明 1973 『異族と天皇の国家——沖縄民衆史への試み』二月社。

伊佐眞一 2007 「沖縄の近代とは——伊波普猷「決戦場・沖縄本島」(上)
『琉球新報』2007年5月21日

伊波普猷(三笥利幸編) 2008 「沖縄人の祖先に就て」九州国際大学教養学会
『教養研究』第15巻第1号。

大田昌秀 1976 「伊波普猷の思想とその時代」外間守善編『伊波普猷 人と思想』平凡社。

小熊英二 1998 『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社。

鹿野政直 1993 『沖縄の淵——伊波普猷とその時代』岩波書店。

高良倉吉 1989 「向象賢の論理」琉球新報社編『新琉球史——近世編(上)』
琉球新報社。

高良倉吉 2000 「『羽地仕置』に関する若干の断章」琉球大学法文学部紀要
『日本東洋文化論集』第6号。

比屋根照夫 1981 『近代日本と伊波普猷』三一書房。

外間守善 1976 「伊波普猷の学問と思想」『伊波普猷全集』第11巻。

與那覇潤 2004 「『日琉同祖論』と『民族統一論』——その系譜と琉球の近代」
日本思想史学会『日本思想史学』第36号。

屋嘉比収 1997 「『琉球人種論』の背景——伊波普猷と鳥居龍蔵との交流」『が

じゅまる通信』No.12(1997年8月15日)。

屋嘉比収 1999 「古日本の鏡としての琉球——柳田国男と沖縄研究の粹組」
沖縄国際大学南島文化研究所『南島文化』第21号。

屋嘉比収 2000 「日琉同祖論」沖縄を知る事典編集委員会『沖縄を知る事典』
日外アソシエーツ。

屋嘉比収 2002 「伊波普猷における「沖縄学」の形成——日琉同祖論と比較言
語学の影響」『東北学』vol.6。

* 本研究は、2006年度科学研究費(若手研究B)による成果の一部である。

注

(1)本文については、『琉球新報』2007年7月3日に全文が掲載されている。詳しくは、この論考全文のすぐ隣に併せて掲載された、発掘者である仲村頭の「東恩納寛博「壮烈・沖縄に應へん」を読む」を参照。

(2)本文は、『琉球新報』2007年5月21日および23日に掲載された。以下での引用は、すべてここからおこなった。

(3)新聞紙上の論争の流れについてだけ、紹介しておこう。伊佐の発掘および彼の著作の発表以降、『琉球新報』では、新川明「「伊波普猷批判序説」を読む」(6月9日)、仲里効「戦争が露出してきた」(7月30日)などが現れ、伊波普猷批判の重要性を指摘するいっぽう、伊波を「民主主義者」「自由主義者」とした外間守善や「人道主義的なデモクラット」「自由人」ととらえた大田昌秀と同様の観点を持つものとして批判された比屋根照夫が、「いま伊波普猷をどう読むべきか——「伊波普猷批判序説」の問題点」と題する伊佐批判を展開した(7月26、27日、8月3、4、6日)。また、『沖縄タイムス』でも7月14日には八重洋一郎による書評が掲載され、少し遅れて9月17日から21日にかけて、「「伊波普猷批判序説」と現在」と題して、津覇実明、屋嘉比収、比屋根薫、富山一郎、金城正篤の5人によるコラムが連載された。10月には

伊佐による比屋根への再批判が、「比屋根照夫氏の反論を批判する」と題して連載された（10月8、10、13、15、16日）。さらに11月になると、伊佐は『沖縄タイムス』において、「『伊波普猷批判序説』と現在を読む」というコラムを連載し、自著を書くにいたる経緯や、同紙に連載された5人のコラムへの応答を著した（11月1、2、5日）。

(4)それゆえ、伊波の「日琉同祖論」が、他の、たとえば明治国家による官製「日琉同祖論」とどう関係するのか、などといった分析も必要であるが、それは別稿を用意したい。とりあえず、屋嘉比の簡潔な指摘[屋嘉比2000]を参照。

(5)もちろん、「日琉同祖論」については、他にいくつもの研究がある。ここに紹介した比屋根照夫の単著[比屋根1981]でも言及され、また、1972年の沖縄の「本土復帰」にあたり、反復帰論を唱えて活躍した新川明が、手厳しく伊波を批判する際に中心的に論じたのは「日琉同祖論」についてであった[新川1971=1996][新川1973]。その他、大田昌秀による研究[大田1976]、近年では屋嘉比収による整理[屋嘉比2000]と展開[屋嘉比1999][屋嘉比2002]、伊波に特化した研究ではないが小熊英二の分析[小熊1998]など、枚挙に暇がない。ここでは、研究史を鑑み、伊波のテキストにできるかぎり忠実に沿いながら「日琉同祖論」をまとめた比屋根の一文を、とりあえずスタンダードな理解とした。

(6)私は、この「沖縄人の祖先に就て」を復刻し、さらに改訂のようすがわかるように、『古琉球』初版との異同もあわせて示しておいた[伊波2008]。なお注(10)も参照。

(7)この『沖毎』版については、沖縄県立図書館所蔵『東恩納寛惇 新聞切抜 15』にある、東恩納がまさに新聞を切り抜いて保存していたものしか確認できていない。『沖毎』の利用可能なマイクロフィルムには1909年2月28日以降しか存在しておらず、直接『沖毎』を確認できない状態である。また、『東恩納寛惇 新聞切抜 15』では、『沖毎』原紙がそのまま保存されている

のではなく、当該部分が切り抜かれ、さらに、一連の文章として読めるようにすべてが途切れることなく整理して貼り付けられている。つまり、全文を読むことは可能なのだが、いつどこまでが掲載されたのかについて正確に確認することはできない。また、17日が連載最終日であることも確認することができなかった。掲載の日付については、『東恩納寛惇 新聞切抜 15』にあるメモ、および、全集第1巻の「解題」および第11巻の「著作目録」によった。

(8)改訂まで視野に入れた本格的な研究を最初に行ったのは、鹿野政直であった[鹿野1993]。また、屋嘉比収も改訂とその改訂が行われた時代状況や文脈に注目した精緻な研究を展開している[屋嘉比1997][屋嘉比2002]。彼らについてはまた後で言及するが、本稿を含め、私は鹿野や屋嘉比の研究および研究手法に教えられ、触発されているところが少なくない。

(9)伊波が引用した部分は、1673年3月10日付けの「当春、久高島知念江祭礼事ニ付、国司被参筈ニ而候故、愚意了簡之所及、申入候。」と表題のついた文書の一部である。この文書は5条から構成されており、伊波の引用したのは第4条にあたる箇所の一部であった。『羽地仕置』原文は、『古琉球』初版の巻末に附録として収録された[古初:393-442]。しかし、『古琉球』再版以降は削除されてしまい、全集版の『古琉球』では原文を確認することができない。原文はたとえば、東恩納寛順の『校注羽地仕置』にあり[東恩納②:172-3]、また、そこには東恩納による注解も示されている[東恩納②:213-5]ので参照されたい。

(10)『新報』版には、5日間の連載にあたり、「沖縄人の祖先に就て(一)」などのように、題名の後に漢数字で一から五まで番号が付されている。引用に際しては、この番号を丸数字で記し、当該箇所を行番号で示した。なお、当然のことながら『琉球新報』原紙には行番号は記されておらず、原紙を利用する場合はカウントしてもらわねばならないが、伊波2008では、『琉球新報』原紙の状態そのままを復刻した上で、行末に行番号を付しておいたので参照

いただけると便利である。

(11)すでに注(7)で述べたように、『沖毎』版についてはその原紙を利用することができなかった。引用は『東恩納寛惇 新聞切抜 15』から行い、これに付された「ページ」——これは見開きにひとつずつ、ゴム印のようなもので押されたと思われる「数字」であり、正確にはページ数とは呼べないが、この数字にしたがって手書きの目次も作成されているため、ともかくこれを利用する——を使って、[沖毎:43]のように引用箇所を示した。

(12)高良倉吉は、『羽地仕置』から伊波が引用した箇所は、全体の主旨として「今春に予定されている国司＝国王出席の久高島・知念での祭礼に対する羽地の意見を述べたもの」であり、「文書全体の文脈に即して解釈しなければならない」[高良2000:126-128]。にもかかわらず、伊波をはじめとした研究者は「そのことを無視し、「日琉同祖論」の言説部分のみを切り取って解釈を弄ぶ状況を招いた」[高良2000:128]と断じている。最近では、與那覇潤が高良の議論を下敷きにしながら、伊波が「元来は久高島での農耕儀礼に対する反対論であった向象賢のコンテクストを消失させ」[與那覇2004:151]たと述べている。

(13)この部分を含め、比屋根が「琉球だより」について詳しい研究を行っている。本稿では、「日琉同祖論」という観点から必要な部分についてのみ言及したが、比屋根はバランスよくこの論考について紹介、検討している。ただし、この段階で伊波がチェンバレンに言及していたことは触れられていない。比屋根1981:57-9参照。

(14)引用した「……即ち沖縄の読書界を紹介しやうと思ふ。」の部分は全集では「紹介しようと思う」と誤記されている。ここでは、『文庫』原典のとおりに訂正して引用しておいた。

(15)以上、この段落の引用は伊波⑩:3-4による。

(16)この論考は「琉球歴史を読む」という題名で『沖縄青年会報』に掲載されたものを改稿した論考であり、本文ですぐ後に出てくる「琉球史の瞥見」

へとさらに改稿されたものである。伊波①:525参照。ただし、「琉球歴史を読む」は残っていない。

(17)引用文中、2回「古事記」が出てくるが『嶽水会雑誌』原典にはカッコはない。全集版には『古事記』と二重カッコが付されている。引用は原典にしたがった。これより後の引用についても、ひとつひとつ指摘はしないが同様にした。

(18)與那覇潤は、伊波の日琉同祖論を1904、5年あたりに示されたものだとしている。それより前の「一九〇〇(明治三三)年からの第三高等学校時代の諸論考では琉球人起源に関して多様な見方を示しており、未だ迷うところがあったように思われる」[與那覇2004:150]という。その論拠として與那覇は次のように述べる。伊波は、1901年の「眠れる巨人」で中国系である「■人三十六姓」を評価したり、翌1902年の「琉球に於ける三種の民」で、中世沖縄における三山の争いを人種的闘争とらえたり、あるいは、1903年の「海の沖縄人」において琉球王国を「海上王国の建設」と讃えていたりする。それは、伊波が「[日本]へ収斂しないところに琉球のアイデンティティを求めた」[與那覇2004:157]ことを意味し、それゆえ、伊波の「日琉同祖論」は最初期にはみられないというわけである。與那覇はここで「琉球人起源」ではなく「琉球のアイデンティティ」を論じており、何か混同が生じてしまっているのかもしれないが、ともかく、ここであげられた論点は、「日琉同祖論」の文脈とは異なるものであり、また、「日琉同祖論」と齟齬をきたすことはない。すべての論点に触れる余裕はないが、たとえば、「眠れる巨人」という論考についてみておこう。

この論考で伊波は、14、5世紀に中国から移住したとされる「三十六姓」の後裔を「眠れる巨人」と呼んでいる。かつて来琉した彼らの祖先は「殺伐を好み争闘を事とせる未開の民」であった沖縄に「人倫」「礼楽」を教え、「その思想界を支配して貢献するところ甚だ多」く、さらに彼らから蔡温などの「政事的偉人」をも生み出した[伊波⑩:7]。現在の沖縄は彼らの祖先が

来琉した「三山時代の再現」というべき状況に陥っており、いま「第二の三十六姓」「第二の蔡温」が現れて、この状況を打開すべきだと伊波は論じている[伊波⑩:8-9]。「琉球人起源」の問題とは文脈が違ふことはあきらかであろう。また、後で本文でも触れるが、この「三十六姓」は、「思想界を支配」しても、「その言語、風俗の点に於て感化を及ぼす能はざるのみか却て感化せられて、今日にては毫も琉球人と異るところなき」状態だとも伊波はいう[伊波⑪:230]。

推測でしかないが、與那覇は、小熊英二の「伊波が日琉同祖論の原型を発表したのは、高等学校在学中の一九〇一年の寄稿からである。」[小熊1998:294]という断定に異を唱えようとしたのかもしれない。もちろん、小熊が1901年3月発表の「琉球の歴史と其言語と」ではなく、1901年10月21、23日に『琉球新報』に掲載された「琉球史の瞥見」の記述をもって日琉同祖論の原型としていること[小熊1998:294]には、厳密に言えば問題がある。つまり、どちらに依拠しようとも1901年に日琉同祖論の原型が公表されたことに違ひはないが、より厳密に前後関係をみるならば、やはり「琉球史の瞥見」ではなく、先に公表された「琉球の歴史と其言語と」を原型とすべきであろう（もちろん、それとても現在われわれが目にすることができる伊波の論考に限った上での原型ということであるが）。ともあれ、日琉同祖論の原型は、小熊も指摘する1901年に現れるのであり、それを1904、5年まで遅らせる理由はみあたらないと思われる。

(19)チェンバレンその人についての言及は、すでに1900年の「琉球だより」にみられる。

琉球語は十年前から言語学者の研究するところとなり、ビー・エッチ・チャンブレン氏は『琉球文法及字書』といふ三百頁の本を書いた、先頃富山房から出た幣原坦氏の著書『南島沿革史論』は、沖縄が日支両国への関係を歴史的に論じたもので、面白い本である。[伊波⑩:6]

「琉球だより」で琉球語について書かれたのは、この部分がすべてである。チェンバレンを読んでいたのかどうかまで確定することはできないが、伊波はまだ高等学校入学すら決まっていない、かなり早い時期からチェンバレンの名を知っていたことはまちがいない。

(20)全集11巻の「年譜」などで伝えられるように、伊波が東京帝大で言語学を専攻することにしたのは、三高卒業の謝恩会での榊亮三郎の勧めがそのひとつのきっかけとなっているのだろう。しかし、伊波の論考をみていると、すでに早い時期から伊波のなかで言語学への関心はふつふつと湧いてきており、榊の勧めが言語学を専攻する直接の原因になったのではないと考えるのが自然である。伊波は『古琉球』初版の自序において次のように書いている。

三十三年に、京都の高等学校に入学した頃には、言語学を修めて、琉球の古語を研究してみようといふ気になつてゐた。[古初:自序2]

このなかの「言語学を修めて、琉球の古語を研究してみようといふ気になつてゐた」という箇所は、『古琉球』再版以降「史学を修めて、琉球の古代史を研究してみようといふ気になつてゐた」と修正された。この修正について鹿野政直は「錯誤に気づいたのであらう」[鹿野1993:24]と述べている。たしかに、三高で伊波は言語学ではなく史学を修めたのであり、錯誤に気づいたというのが正しい推論であらう。しかし、私はむしろこの錯誤は、伊波が三高の時代から言語学に強い関心を持っていたがゆえにおかしたものではないかと考える。外間守善によれば、三高時代の伊波は「遠く離れている沖縄の郷土史研究に着手し」て、「歴史研究の第一歩を踏み出して」おり、「そのまま順調に進んでおれば、史学者伊波普猷の誕生をみたことであらう」にもかかわらず、東京帝大に入学した伊波は「史学希望から言語学専攻に転向している」[外間1976:516](傍点は引用者)。たしかに伊波の故郷沖縄への関心は三高時代からはっきり認められるとはいえ、彼の着手していた研究はひとり史

学に限るものではない。外間のように伊波の言語学専攻を「転向」と考えるのではなく、むしろ私は伊波の言語学への学問的関心は最初期からすでに伊波のなかで大きな部分を占めていたと考える。